

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第7回）「キャリア教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成21年11月19日(月) 午後3時30分～午後5時30分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	廣嶋憲一郎、小野雅保、石井友行、岡本昌子、安井実、根本裕美、飯塚剛、野田恵威子、望月徳生、高橋吉久（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	五十嵐浩子 統括指導主事、芝田智昭 指導主事

1 はじめに

部長

委員校長先生のほうでつくっていただいた表はもちろん、実践事例を担当される先生方には、忙しい中資料をつくっていただいた。限られた時間の中で、内容の濃いものにしていただければと思う。

事務局

それでは、事務局で用意した資料についてご説明する。まず、次第も兼ねた協議資料ということで、本日はいつもご提案をいただいている石井校長先生の実践プランの検討、ほぼ今日で確定ができるのではないかと考えている。その後、前回分担した6人の先生方の実践事例の検討を行う。

2 協議

委員

前回の話し合いを受けて修正したところについて説明する。まず一番左側のところ。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期それぞれのところで、一番右側にある四つの能力について、やはり観点として入れたほうがいいのかという指摘があった。

Ⅰ期については①～④まですべての観点が入っていたが、Ⅱ期については意思決定能力、Ⅲ期については情報活用能力がなかったので、文科省のパンフレットを見ながら、例えばⅡ期の意思決定能力については一番下の「自分の係を選択し、進んで責任を果たす」というところを入れてみた。Ⅲ期は情報活用能力のところはなかったので、上から二つ目の「・」の「上級学校の種類や各種職業に必要な資格等の情報を活用できる」ということを入れてみた。

右側について、まず道徳を入れようということで、岡本先生にアイデアをいただき、主題名、資料名ということで、やや横に長い四角が道徳の内容になっている。それぞれ例えば自己肯定感と自立心を育むのところでは、「友情」「自分の考えで」というところを、また望ましい勤労観・職業観を育むのところでは、上から四つ目の四角で「きれいになった公園」を入れた。中学の道徳はちょっとわからなくて、今後情報をいただければということで、仮に「中学・道徳」と入れてある。

それから、前回の話し合いで、Ⅱ期、Ⅲ期をつなぐアイデアが高橋先生から出てきたので、それを入れさせていただいた（「学校紹介・学校自慢」）。学級活動・クラブ活動に関連しそう

だということで、縦長の細長い四角がそこに入った。それから道徳の内容についても、資料名まで入れたけれども、今日岡本先生からご連絡をいただき、副読本については改訂で中身が入れ替わるものがあることがわかった。教材がないところもあるので、そこをどうしようかご検討いただきたい。

今度は、一番右側。それぞれ四つの能力について具体的にどんな活動になるのか、少し開いた言葉でということでアイデアをいただいた。それを反映させたような形で矢印の下、四つの言葉で表現してみた。

一点気になってきたのが、各Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のキャッチフレーズ。「夢から希望へ」「希望の実現に向けて」で、当初「自分大好き・友達大好き・学校大好き」を提案し、アドバイザー先生のご指導もあり「自分大好き」のあとに「好きなことを見つけよう」という表現にしたが、「自分大好き」と「好きなことを見つけよう」というのがつながらないような気がしてきた。「自分大好き・友達大好き・学校大好き」でいくか、あるいは「自分大好き」をとってしまうか。少しこの表現は難しいなと思って、これは課題だと思っている。

委員 道徳について付け加えると、実践例をとということで、本校が17年度、18年度文科省の研究指定を受けて研究をしたときの道徳の指導計画にもとづいて教材を入れていったが、今度の改訂などで副読本がどんどん新しくなった段階で、例えば4年生の「親子清掃」という教材はどこの会社の副読本からも削られてしまった。「では、実践してみよう」と思った先生が探しても、昔の副読本にしか載っていないというのはまずいので、ここは差し替えをお願いしたい。

それではまず左側のⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期のところ、それぞれの四つの観点に沿ってすべてのものを網羅して入れていただいたがどうか。縦の関連を見てどうか。

委員

四角の中に埋めていくのは普通の書き方だが、三角形をうまく使えないか。先細りの三角形であると要素が少なくなり、逆の三角形であると要素が広がっていく。基礎・基本的なところから発展していくようなイメージをその中に出していくと、5年生、6年生くらいから中学の生活に入ってきて、そうした要素が子供たちに身に付いていくイメージとしてとらえられる表現にならないか。

委員

たしかにそれができると、時数とかいろいろな要素を視覚的に読み取ることもできて、おもしろいアイデアだと思う。しかし、実際に表記していくとなると、いろいろな課題も出てきそう。ほかのところ、例えば特別支援学級の細長い四角のところとか、そういうところもどうなっていくかなという気もする。

委員

次に、「自分大好き・好きなことを見つけよう」の表記が、「自分大好き」と「好きなことを見つけよう」のつながりが少し気になるという委員先生からのお話があった。「好きなことを見つけよう」でまとめるか。

委員

「自分大好き・友達大好き・学校大好き」も捨てきれないなという気がする。要するに集団に適応するというので、まず自己肯定、それから友達、そして学校集団への適応ということ。

委員

2段構えにしてしまって差し支えないような気がする。「自分大好き・友達大好き」をすべて入れてしまって、「好きなことを見つけよう」という形の2本柱にしてはどうか。

部長

Ⅱ期の「夢から希望へ」は、この四角の中の「自らの将来についての希望をふくらませる」の前段で入ってくるし、Ⅲ期の「希望の実現に向けて」もこれを噛み砕いた文章として入ってきていると思う。そうすると、Ⅰ期の五つ目の「自分の好きなことを見つけ、のびのびと活動する」というのが、「好きなことを見つけよう」「夢から希望へ」「希望の実現に向けて」の文脈の中ではわりと続く。「自分大好き・友達大好き・学校大好き」は要するに自分と他者との関係、あるいは集団へとエリアが広がるイメージ。もしかしたらⅡ期、Ⅲ期にもかかわるので、副題で使えそうな気がする。

キャリア教育というのは刻苦勉励ではないけれど、決して勤労、勤労というわけではなくて、自他を肯定でき、その中で学校に対して好感を持つことができるというイメージのキャッチフレーズになると思う。「好きなことを見つけよう」でよいかどうかは別として、複数入れるのももちろんよいとは思いますが、流れとして焦点化するととなると後段のほうかなという気がする。

委員

「幸せを送るリーダーに」というのは5、6年のくぐりの話のときに出したもので、5年生のところにおいてあるが、内容的には6年生のもの。そうすると、5年生の段階で道徳が2つできてしまう。この流れからいって「ぜひ5年生の勤労観」というのであれば、5年生のものをもう1回チョイスする。1学年に道徳が2つということで気になるのであれば、少し動かしてこれを6年に持っていく。

委員

「私の未来設計図」というのも、完全に6年の単元か。

委員

6年の最終単元。

委員

では、それを下みたい隣同士に並列で並べることも考えたい。

部長

「望ましい勤労観・職業感を育む」の下の星型の「中学・道徳」のところに「働く喜び」と

か「勤労の尊さ」が入ると思う。

委員

いちばん最後の、3年生の横ならびに広がっている「進学（学校選択）・就職」というところが気になる。進路選択とかのほうが一般的ではないか。

委員

左側の子供像をせっかく委員先生に各期四つずつ入れてもらったので、それを意識するように点線か何かで横に線を入れて、例えば人間関係とか情報活用、将来設計、意思決定を表記したほうがわかりやすいのではないか。例えばI期の三つ目、「身の回りの事象への関心を高める」の前までが人間形成。その次が情報活用で3番目が将来、4番目が意思決定だと思う。

自分たちはわかるけれども、初めて見る人は右側のことが左側も実は生きていると見抜けないうと思う。

事務局

全学習期を通じて学習する内容のこの学習と対応できるというか、それに沿ったものであるというのはなかなか言いにくいと思う。

例えば、I期の最後にある「自分の好きなことを見つけて、のびのびと活動する」。これは、四つの学習する内容でいうと何にあたるのかと言われると、情報活用なのか。のびのびと活動するというのはどれにあたるか、なかなか言いにくいではないか。

委員

実は正直なところ、I期の例えば黒ポチの上二つが人間関係形成だと言うならば、一つの文章にならないかと思っている。だから、ポチはすべて四つあってほしい。例えば「学校生活に適応し、友達とのかかわりを深める」とつなげてしまっている。それから、ちょうど小学校6年生と書かれているところの二つも、「役立つ喜びを体得し、社会と自分との」とつなげてしまっているという気がしている。

左側の子供像はもう無理やりにでも四つということで、右側ともタイアップしているという見方ができれば落ち着く気がする。見た感じで五つあると、「あれ？ 何？」という感じになるので常に四つ、例えば番号の一致があるといいかな。もう少し表として見やすく、シンプルになるかと思った。

部長

意思決定能力という、「主体的に解決を目指す」最終的な段階がある。右の文章を読んでもみると、「自ら課題を設定して、その解決に取り組む能力」とか、少し上の計画実行能力のところにも「実際の選択行動で実行していく能力」とかが示されているがこれは非常に重たい。

ほかには軽いとは言わないけれど、収集したり理解したり、把握をしたりとか認識の問題だが、意思決定能力は自分で本当にやり抜いていくような結構レベルの高い実戦能力みたいなところにかかわってくる。この柱自体が同列じゃないだろうという気がする。

もっと言ってしまえば、四つがきれいに分かれているけれど、実はだれかが前にいわれたか

もしれないけれど、かなり重なり合ったりして、ここの解釈は意外とわかるようでわかりにくいところがある。下の文章を見るだけでも、「望ましい人間関係」は何をするにしたってベースになるじゃないかといえ、そうになってしまう。

それがあるからこそ、本当に望ましい人間関係が育くまれて情報活用能力を選択して活用するのであって、悪用するわけじゃなくてね。でも、活用するバイタリティとかエネルギーみたいなものは、やはり夢とか希望とか将来志向性があるからこそ推進力になる。

最終的にはそういうものを総合的に発揮し、未来に解決を目指すという態度の問題になってくるのかなと。これは能力だから、どうしても分析的に能力が四つあるので、ここのところはあまり触るとつらくなるかなという感じがする。

委員

私は普通の教員なので、自分がこれを見せられてやれといわれたときに、どうしようかなと思った。右側の四つの柱は、学年、発達段階によって微妙にどこかを太くしなければいけないみたいなものがありそうだけれど、この四つの柱は一貫して小学校1年から卒業する中学3年までの間に高めていかなければいけないものだと思う。

もし、自分が例えば小学生を教えることになったときに、「学校生活に適應する」から始まるのだと思う。だから、一つ目の黒ポチは「これを育てるためにやっている」と言われるよりは、こういう子供たちにするように見ていくけれど、この4本柱は常に頭に入れながらことあるごとに活動で使うというか、工夫しなさいと言われていたと思うほうがやりやすい気がする。

例えば「学校生活に適應する」を①にしても、人間関係を形成する能力かもしれないけれど、学校ってどんなところとか、友達がどんな子どもたちかという情報を収集しなければいけない。その拙い情報を分析というか、自分なりにこういうふうにしなればと考えて適應していく。だから、教員サイドは「この黒ポチは、このためにやってくれ」ではなくて、そういう子どもにするために、この能力を高めるためにどういうふうに工夫すればよいか、いろいろな工夫をしていく中でいろいろな事例が生み出せると思う。そこから出てきたもので、もう少し工夫したほうが人間形成する能力を高めるときはいいというように、少しずつ発展できるかなと思ったりする。初めから「このためにやってくれ」とか言われてしまうときついかもしれない。

委員

ではⅠ期もⅡ期もⅢ期も、とりあえず四つに言葉をまとめていただく。あとの表記については少し保留ということにする。

このあと1事例10分くらいで6事例の紹介をいただいた後に先生方から意見をいただいて、手直しをしていきたいと思う。

委員 (事例1)

「この町大好き・石神井大発見、お手伝い探検に行こうよ」という単元である。委員先生のほうとやはり少し違うかなと思ったのは、「手伝いを通して社会の一員としての自分の役割に気づく」というところまでは、まだねらってない。社会の一員としての自分の役割までは、まだ2年生なのでそこまではたどり着けない。地域における自分の生活を上げるとか、地域にお

ける愛着を強める、いろいろな大人の人がいるんだとわかるとか、その程度である。自分の役割というところまではたどり着けないと思う。2年2学期を20時間とした。どこまでが20時間でいいのか。「石神井大発見」全体を通すと38あるが、とりあえず2だけだと20時間なのでここに入れた。

ねらいは、「自分たちの住む町にあるものや場所、公共施設などの様子を見たり調べたり、そこで働く人とかかわったりすることを通して町の良さに気づき、愛着を持って自分の生活を広げることができる」である。生活科で言うと、内容の3と関連している。

キャリア教育との関連を見ると、生活科が自立の基礎ということなので一致していて当然だけれど、「キャリア教育の目標である自己および他者への積極的関心の形成・発展は生活科の目標と共通のものがある」というところを載せた。「自分と身近な人、および社会および自然とのかかわりに関心を持ち」というところが、まさに一致する部分かなと思う。

この単元に関しては、「今まで家庭、学校、友達とかかわりながら関心を広げてきたこの時期の児童にとって、地域に出て自分たちの生活を支えてくれるさまざまな大人と出会うことは」ということで、キャリア教育の低学年の課題と関連させて、「身の回りの仕事や環境への関心・意欲の向上を図る上でまたとない機会となる」とまとめた。

まず「町のどこに行くと町の人と仲良くなり、町のことがもっとわかるかを考える」というところからスタートする。この前に町の中をいろいろ探検しているので、ずいぶん町のことについては詳しくなっている。そして「行きたいところごとのグループに分かれ、準備を始める。最初に目的の場所に行き、仕事を見せてもらったり、挨拶をしたりし、お手伝いには何が必要かを聞いてくる」。このときに名刺を持たせて伺わせる。

中学校の職場体験と違うので、できることも限られている。2時間か3時間のものだが実際に中に入ってみると、この子供たちはやはり大人の姿を見ていないことがわかる。大人は家にいるお母さん、お父さんと、お父さんの仕事の姿も見えていないし、お母さんの仕事の姿も見えていない。彼らが見ているのは、教師しか見ていない。本物の、本当にいろいろな人が働いているところを見せたいというところからスタートした単元なので、いろいろなお手伝いをさせてもらった。

実際には20カ所に分かれて、90人が動いた。商店街、商店、公共施設、幼稚園、お寺もある。公園も畑もある。そのあと「見たり聞いたり、お手伝いをしたりしてわかったことをまとめ、発表会を開き、友達や地域の人に伝える」。保護者も来ていたので、ここに入る。

それまでの町探検が知的発見ということで、どうしても特定の場所に限られていて人の姿を見ることが少なかったので、人や仕事に目を向けられるような言葉をかけて選択をさせていく。事前に挨拶や質問の仕方、お礼の仕方を練習させる。これも生活科の中でカウントしていく。最後のところでやはり大事なというのは、「町の人から学んだことを共有化・共通化できるよう全員で話し合う時間を持つ」ことである。

「事例に見られた児童の姿」に、今話したことを少しまとめた。1学期には「町の素敵を見つけよう」という目当てのもと、地域の公園や商店、消防署、幼稚園などに出かけ、さまざまな人が地域にいることや皆のために働いていることに気づいた。

本単元では人とかかわることの多い商店やスーパー、公共施設、農家に出かけ、仕事の様子を見せていただいたあと、実際にお手伝いを行った。国産の肉のみを扱うことに誇りを持つ姿、27年も毎日おいしいパンのことを考え、つくり続ける姿などに触れ、2年生なりに働くこと

の素晴らしさや誇り、地域の人への憧れを持った。

探検発表会ではお世話になった地域の人たち、上の写真がそうである。これは学校に給食を卸して下さっている肉屋さんですが、国産しか扱わないこと、シュウマイを5秒でつくるというあたりにすごくびっくりして帰って来た。下が、発表会でお花屋さんはお花をいかに大事にしているかを実演してくれている写真である。地域の方が1番前にいて、お話を聞いてくださった。

探検発表会ではお世話になった地域の方や保護者も招待し、伝わるように工夫しながら発表し、褒められたことに喜び、自信を持った。まとめの授業では町の人々の笑顔、優しさ、努力等を多くの児童が町の人から学んだこととして挙げ、そういう人になるため今できることとして毎日友達に優しく過ごしたい、もっとかけ算をがんばりたい等の言葉が聞かれた。

部長

とてもいいと思ったところはねらいが書かれていて、真ん中の単元のあらましはある意味では単元計画の概要ですね。やったあとにそのねらいがどう達成されているか、子供の姿を通して書いてもらっていると思った。

委員 (事例2)

自己肯定感を育むということで、「マンガ家になろう」という5年生の道徳の資料を持ってきた。ねらいは、「人は誰でもほかの人にとって代われない個性を持っている。個性を伸ばすということが自分の長所に気づき、自分らしさを発揮しながら自己を形成することである。友達とのかかわりの中から自分の良さを知り、積極的に良いところを伸ばすことの大切さに気づかせる」であり、自己肯定感に気づいていくということである。

本事例とキャリア教育との関係について書くと、「自分の好きなこと、得意なことを職業として、人々に夢や希望を与えてきた手塚治虫さんの姿は子供たちにとって輝かしいものであろう。本授業を通して自分や友達の良さに気づく中で、自己肯定感を育み、将来に向けての夢や希望を持つことができる心を育てる」である。

先ほど根本先生のお話があったので、事後の子供たちの様子などを入れたほうがよければ、もう少しそこは膨らませてくることは可能かなと思う。少し写りが悪いが、こういうワークシートを使って登場人物の気持ちを推し量って、最終的には子供たちが自分の良いところを見つける。友達に良いところカードを書いてもらって、その中から自分の良いところ気づいて、それを伸ばしていこうとする。1単位、道徳の時間35分のうちの実践である。本時展開をもっと絞ってしまって、後半部分をもう少し膨らませてくることは可能である。

委員 (事例3)

総合的な学習の職場体験である。中学2年生で18時間以上の扱いにした。ねらいはその三つである。キャリア教育との関連は、いつも見ているこの表で「望ましい勤労観・職業観を育む」である。

あとは、1時から18時までがだいたいどんなことをやるかということを書いた。先程、小学校の先生が学習後の子供たちの様子がこんな感じだという報告を入れたほうがよいといったので、それを入れるとなると、⑥のところに少し書き入れることになると思う。

2枚目は別に載せなくても、この流れでそれぞれが工夫しているいろいろやればよいかなと思う。誰かがこれをやる時に18時間をどうするのかという柱があって、その柱をそれぞれの学校に合うように工夫すればよいと思う。

自己紹介カードは、要するに事業所の人に自分をまずアピールするために書かせるものである。働くときに「私はこういう人物で、こういうことをしたいと思っている者で、ぜひともよろしくご指導ください」と言って、あちらの方もこういう子が来るという理解を深めるためのものである。

委員

3時間目と4時間目の間に、事前打ち合わせに行くのではないかな。

委員

うちの学校は時間内に行かせないで「放課後に行ってください」と突き放してしまう。それは学校事情なので、これは放課後にやらせようと考えればよいことで、4時間目のところに事前打ち合わせを入れるように改めることにする。

委員

ねらいをより深く達成するために事前指導の段階とか、回って行くときにすごく配慮していることってあると思う。そういうことを少し入れたほうが、実際これを実践なさる先生がよりわかるかと思う。

委員

総合のねらいとしてどうか。今回改訂期ですので、総合的な学習の時間として出される以上ここはやはり見られると思う。

事務局

あくまでも実践プランの中身というのは、キャリア教育の中のわれわれが考えた四つの柱を総合なり道徳なりの枠を使ってどんなことを学習させるか、どんな活動をさせるかということの端的に表現した内容だと思う。これはあくまでもエキスであって、実際に授業レベルでするにはどうしたらいいかという説明をするための事例である。

事例については、キャリア教育という時間割はないので、総合的な学習の時間の中でキャリア教育のねらいに迫るとのことである。ねらいについては、やはり総合的な学習の時間らしいねらいを書いておいて、③のねらいで三つ書いてある内容は④のキャリア教育との関連に入れ込んでいくような方向でお願いできればと思う。

部長

職場体験をやっている中で、向こうのおじさんに失礼なことをやると次ができなくなってしまふから、やはりマナーとか他者とかかわりが必要になる。礼儀という項目は確実に入っているから、これは道徳になると思う。だから、総合的な学習を軸にしながら職場体験を切り込んでいくというよりも、むしろ職場体験という事例があって、そこからキャッチできるねらい

というのをやらないと、少しギクシャクする。

ここに出ている、例えば「この町大好き」が生活科だったからいいけれど、「牧場体験学習」とか「未来設計図」とかは総合である。行事と書いてあるのは特別活動だろうけれども、意外と職場体験の軸足って難しい。きれいに切り込めればいいけれど、やはり総合的な学習の時間のねらいを明確にしつつ、そこで絞り込んでという形か。

事務局

実践プランの中のカッコ付き、「職場体験」とか「リトルティーチャー」というのは単元名である。あるいは活動のまとまりというか、ユニットというか。それを、どの教育課程上の枠を使ってやるかということだと思う。だから、職場体験を総合的な学習の時間の枠の中でやる。

部長

総合的な学習の時間の枠でやったときに、礼儀の意義を理解して、時と場合に応じた適切な言動をとるような指導項目を入れるとまずいかな。

アドバイザー

まずくない。

部長

時と場合に応じて適切な言動ができる中学生になってもらいたい。

3本柱の1本として思春期からやはり社会に出ていく、他者とのかかわり、半分大人の自覚を重んじつつ、1日や2日だけれど本当にいい経験になる。礼儀のことをなぜ総合でやるんだという感じも常識的にはあるけれど、実は中学校のこの2日間、3日間というのは結構大きな要素がある。

アドバイザー

礼儀というと何か押し付けるみたいな感じはあるけれど、礼儀という表現を変えればいいのではないか。マナーとか人とかかわりを学ぶとか。

委員

マナーとかそういうことが最終目的ではなくて、そういうものに配慮していく中でよりよい人間関係を築いていくとか、人とかかわる力をつくっていく。そういう形にしていけば、総合的な学習の中にうまく入れ込んでいけると思う。

委員 (事例4)

委員先生にひとくりにまとめていただいて、「学校紹介・学校自慢」とした。その中に部活動体験というものも入ってきた。結局1枚にはならず、表側と裏側で一方が「部活動体験」、片方が「学校自慢」で少しラフに書いてみた。

実際に活動としては2枚ほどのカラー刷りのものに、コンピュータ室でワイワイレコーダーを使ってこんなものがつくれましたという手順表みたいなものと、実際に子供たちがつくった

部活動紹介である

「学校自慢・学校紹介」は、総合の時間3時間ほどで実際にやったものである。キャリア教育との関連性では柱立てがあるので、細かく具体的な言葉にしたらどうなるかを入れてみた。単元の指導計画で3時間扱いではあるが、だいたいこうした流れで実際の活動を行っていったということである。

本時の指導計画をどこにしようかと思ったが、要は3時間扱いにしてしまったので、その3時間の流れがわかっているというのでこんな形にした。使用したシートとか学習状況がわかる資料は、こちら側に色刷りになっている。そのうちのどれかを載せることになると思う。これが「学校自慢・学校紹介をつくろう」である。

もう一つが部活動の体験である。これは何の時間にするのか、小学校のほうで確認してくるのを忘れてしまった。学級活動だったのか、総合だったのか確認できていない。

小学校で希望調査をしてもらって、それをまとめたものが中学校側に来て、誰が体験に来るかをまとめたうえで1週間の期間をおく。複数の部活を体験してもいいことにしている。ちょうど明日までが体験期間になっている。

終わったあとで感想文を書いてもらう。また、中学校に入ってから部活動を考えてもらう中で感想文などを書いてもらうことになっている。体裁としては少し整っていないところもあるが、見ていただければと思う。

委員

「学校紹介・学校自慢」と「部活動体験」は一連のものではなくて、活動としてはそれぞれ独立しているということか。

委員

「学校自慢・学校紹介をつくろう」については、クラスごとでの対応になってしまうと思う。今、緑小学校と桜小学校の6年生の先生方で連絡をとって、こういうのをつくったので見てくださいという段階で、まだ「返事が来た」とか「見ました」「こういうものを書きました」という段階ではない。

委員

それでは、「部活動体験・部活動を体験しよう」という3時間扱いについてどうか。5年生と6年生は何の時間に扱うのか。

委員

たぶん小学校は学級活動だと思う。要するに中学校に向けての進路指導の一つとして入るとすれば、学級活動の内容(2)に該当すると思う。

部長

部活動は教育活動における主要な活動だという位置づけがあるけれど、教育課程内にきちんと位置づけられているわけではない。外時間だから、そのへんは少し微妙だと感じる。

委員

小学校での扱いと、中学校での扱いがずいぶん違う。

アドバイザー

でも、現実にもどこもやっている。例えば学年をうんと広げるとか、継続的にやるところは別だが、少しやるくらいのところはどこでもやっている。中学校のほうはその他でしょうがない。

部長

特別活動というわけにもいかないし、部活動と書いてもいいか。

アドバイザー

部活動は部活動でいいと思う。連携の事例としては確かによいが、3時間くらいではあまりインパクトがない。

委員

実際には、まとめも含めて準備で2枠くらい使う。一応1週間とっているので、時間としては放課後1時間で5日分あるので、それを足せば7、8時間になる。

アドバイザー

この活動が発展して、何とか部では小学生と中学生と一緒に活動する機会があるとか、そういう発展の仕方をしている例はないのか。

実は、その例が本当は必要である。だいたいどこでも2時間かそこらはやっている。それをベースにして、例えば水泳部が夏に小学生に教えるとか、陸上大会の指導に中学生が来るとか。そういうところに発展していく例をチラホラ僕は聞いているけれど、そのへんの例が出てくるとすごくいい。時間の枠でここでというのはもちろん必要だけれども、連携とか一貫と言ったときにはそういうところで発展していくことが大事である。

委員

小学校・中学校は体育館や校庭が2箇所ずつあるので、今のところ小学校では中学校でしかやっていない活動を小学校の施設を使って5年生、6年生に入ってもらいましょうということになっている。体力差があるので、5年生については週に1回程度、6年生については週2回なり3回参加してもらえないだろうかと検討している。

アドバイザー

そのへんまで踏み込まないと、一貫校をつくる意味があまりない。部活では3時間の事例でいいと思うが、どこかでそのへんのことを検討しているとか、将来に向けてそういう構想があるみたいなことが少し入ったほうがいいかもしれない。一緒にやるというのもある。教えることでもいいと思っている。中学生が小学生に教える。教えるって自分が高まるので、教わる側もいいけれど教える側も結構高まる。リトルティーチャーの発想と一緒にである。

委員

では、今実際に実践していることにプラスして、将来に向けての構想等もうまく入れ込んでまとめてください。

委員（事例5）

6月のときに提示したものを若干並べ替えた。今まで聞いていて、キャリア教育うんぬんについては特別支援学級も当然あるべきだと思う。小中一貫の中で、どういう位置づけで特別支援学級が入っていけばいいのか、悩みながら話を聞いていた。

特別支援学級では、1年生から6年生まで全員を対象にお別れ遠足に行く。3年から6年であれば総合でもいいのかなと思いつつ、生活単元学習として位置づけた。お別れ遠足の事前学習ということなどを含めると、4時間ではなくてももう少し時間的には長くなる。その中のいわゆる総合のような部分については、4時間くらいの扱いになるということでこのような形で位置づけた。ねらいについては、その子の実態にもよるが、どうしても支援をしてくれる人の力を借りて、その箱の中で育てていく子供たちが多い中、いろいろな意味の自立があると思うが、やはり自立ということを促していく。

子供に対して、あるいは保護者に対して自立ということを啓発していくことはやはり必要なことなので、小学校としても取り組んでいく必要があると思っている。自分の将来については、見通しを持つことと夢を持つことは必要かなと考えた。4番のキャリア教育との関連については、前回出したものを多少入れ替えたものになっている。ここに後半の部分に書いてある。

本学級ではキャリア教育として実践している例は少ないが、障害があり、社会参加に対してさまざまなハンディキャップがある児童たちに、「1 児童の生活の主体者となること」、「2 社会の一員としての役割を担うこと」、「3 さまざまな可能性を持つ子の段階で夢を持たせること」については、やはり常に追求していきたいと思っている。そのようなことが実現できればいいなということで、このへんを実践しようと思っている。

5番の実践については、どうやって概要をまとめようかと悩んでいる。これだけでは意味はわからないし、単元計画でもわからないし、要旨については6月に示した。そういう中でうまく盛り込んでいけばいいのかと考えながら、今日まで至っている。

委員

基本的なことだが、教科の学習で生活単元学習というのがあるのか。

委員

各教科、道徳、総合もあるが、領域教科を合わせた日常生活の指導と、生活単元学習という領域教科を合わせた指導の中でやっている。今は特別支援学校だが、養護学校の教育課程にもとづくこのような形の位置づけもできる。

特別支援学級については、通常の教育課程に準拠して教育課程を編成してもいいし、特別支援学校の教育課程にもとづいてやってもいいということで、どちらでもおいしいところをとろうということで、言ってみれば何でもありということもある。本学級では生活単元学習とい

う位置づけの中で、このようなことについては実践している。

委員

「生活単元」にしても「日常生活」にしても「自立活動」にしても、領域の各単元ではなくていわゆるこちらの4本柱みたいなもので、子供たちに自立だけではないけれどもいろいろなコミュニケーションの獲得も含めて、本来この子供たちが育っていくにあたって必要な力を必要な形で育てていくときの学習活動である。それは各教科に置き換えて、教科指導だけではやはり身に付かない。やはり子供たちの全人格を総合的にとらえて、こういう活動を通してやっていきたいと思いますという形になる。

事務局

方向としては「働くってなあに」のあとに、通常と同じように「生活単元学習」と続けて入れる。今「生活単元学習」の「買い物や調理など」と書いてあるカッコの中を、「買い物に行こう」などと単元名らしくして、「生活単元学習」を後ろにつける。「日常生活の指導」を例えば「自分のことは自分で」みたいにして、「日常生活の指導」を後ろに持っていく。そういうやり方はできると思う。

委員

四つの順番はこれでよいか。

委員

1年から6年の間でこういう力をつけていきたいと思いますというのであれば、当然順番は変わるべきだと思う。低学年のときには日常生活の指導に重点が置かれていたものが、高学年になればより分化した自立活動というところが重点化していく。実態にもよるが、おおまかにはそういう形で教育課程というか時間設定をしていくことは必要であるという気がする。

ただ、これが小中一貫の中での今回の実践プランになっていることを考慮する必要があるのではないかと。そのへんのところがずっと私の中に引っかかっている、大泉学園小ひまわり学級としては1年から6年までの間にこういうことをこういう思いでやりたい。それは、ほかの特別支援学級でもやはり共通する部分でもある。

ほかのところみたいに、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期みたいな形に当てはめる必要があるのか、ないのか。特別支援学級では特別支援学級としての思いがあって、例えば小学校で作業をやっているところがあるから、中学校でもそれを引き継いでやってほしい、小中連携でというような思いを持っている小学校の先生がいるのも事実である。ただし、中学校の今の実態を見れば、そういうことは全くありえない。そういう中で、小中連携、一貫という部分が特別支援学級にどのように反映されてくるのか、そのへんのビジョン、練馬区としての構想がまったく見えないのでなんとも言えない。

中学生になると、ここにも書いてあるが、来週中学校の合同文化発表会があって、うちの子供たちはそれを見に行くのをすごく楽しみにしている。「僕たちは、私たちは、中学生になったらここに来てこうやってやるんだ。歌うんだ。踊るんだ。芝居をするんだ」と憧れもあるし、やはり自分の将来の姿を重ね合わせるではないけれども、そういうものを目の当たりにするこ

とによって、やはり子供たちも見通しというか夢を持ってがんばろうということになる。

委員

スペースの関係で一番上まではいけないかもしれないけれども、「文化発表会」は少し四角を伸ばして、小学校のほうにかけてもよい。

委員（事例6）

事例1、事例2に分けた。事例1について、支援学級は教科授業の中に技術家庭という教科ではなくて、職業家庭という項目になっている。その中で就労について学ばせていくことを目標にしている。

本校は職業家庭を 35 週×2コマで 70 時間で行っている。概要のカッコの数字は、それぞれの項目に割り振った時間数である。ねらいについては、「社会的自立を目指し、日常生活や就労に必要なことを学び実践で活用できるようにする」ということで進めている。職業家庭のねらいとキャリア教育の関連では、「基本的な生活習慣の習得をさせて、コミュニケーション能力を向上させていく」ことである。ここで抜けてしまったが、就労に関して意欲を高めていくということがやはり入っていないといけないと思っている。概要の下に少し余計なことを入ってしまったが、(注)として一つ項目をつくっている。

挿絵になっているところは、写真を入れていきたい。先ほど写真については説明をということなので、一応黒ポチというか*で、一つ目は「伝統工芸」の体験学習である。これは修学旅行でやったやつだが、友禅染である。

二つ目が「農作業を通じて地域の人と交流」で、本校の畑は地域の方の土地を借りて実習をしている。その中で地域の方も当然作物をつくっているけれども、つくり方とか収穫などでお世話になっているので、そういうことを通じて交流する。農作業の体験をということで、そのへんの写真が入ればよいと思っている。

三つ目は、本校は併設してデイサービスセンターがあるので、その方々と交流を行っている。障害を持っているから与えてもらうというだけではなく、自分たちにもやはりできることがあるんだということで、そういう経験を含めてデイサービスセンターの方々と交流を重んじている。

四つ目が、職業家庭の「調理実習」の授業の中で行っているお弁当づくりである。障害のある子たちの就労状況でいくと、清掃業、クリーニング、調理補助、簡単な経理とパソコンが多いので、本校ではこの題材を授業で扱っている。

事例2については、総合的な学習として位置づけた「職場体験」である。2年もしくは3年で行っている。

④で本事例との関連で、「職業体験を通して勤労観・職業観を養う。また、自他の理解を深めコミュニケーションの向上」とした。支援学級の子たちについては、とにかくコミュニケーション能力が苦手、もしくはとれない子たちがいる。そのへんがやはり重点的に指導している部分である。それから将来に向けて、就労についてやはり興味を持ってもらうということで進めている。

⑥もプラスαで入れてしまった項目である。少しでも多くの職種から選択して就労できるように企業に働きかけることとか、生徒に学習させていくことがわれわれの課題でもある。特別

支援学級の教員だけではなくて、通常の先生方もいろいろな教員の方にこういうことをわかってもらって、意識していただけるといいのかなということでメッセージ的に入れた。

事務局

事例2の今後の課題として書いてある内容を、事例1のキャリア教育との関連に入れてほしいと思う。特別支援学級の先生方にこの部会に入っていたのは、まさに就労にかかわるキャリア教育部会だからである。小中から一人ずつ、入ってもらいたいなと思って協力をいただいている。

特別支援学級のとくに中学校を卒業してからの子供たちの就労は、本当にここに書いてある通り難しい部分が多い。小学校1年生からのキャリア教育で、なんとか就労につなげていきたいという最終的な思いは私の中にある。事例1で今話されたように課題があって、それをキャリア教育との関連の中に入れて、概要で70時間分すべてあるけれども、この中のどれか一つを取り上げていただきたい。

取り上げ方としては実際の就職先として、先ほど望月先生からもあったが、就職と直結する内容、中でも特別支援学校の校長先生が今はパソコン関連が多いように言っていた。

アドバイザー

最初に皆さんが議論していたのがⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の子供像と中身の整合をどうするか。要するに四つに揃えるか、揃えないかという話があった。とりあえず事例がどうなっているかずっと聞いていたが、今あるのを仮に四つに整理することは、私は文字だけの問題だったらそんなに難しくないと思っている。

一覧表の中だけでできていても、事例とつながらないと困る。ねらいの中に子供像に関連する言葉が出てきたほうがいいのか、キャリア教育との関連で出てきたほうがいいのか。どちらかなと思わずずっと聞いていた。結論から言うと、キャリア教育との関連の中で出すほうがアバウトに書けるのでやりやすい。目標の中だと、あまりにも限定される。

仮に4本にしたときに、一つの事例で四つすべてをクリアできないかもしれない。一つか二つでいいから、Ⅰ期だったら五つある言葉のどれでも使えばいいと思う。だいたいどこかに該当する。どこかフィットしている。Ⅰ期もⅡ期もⅢ期も、人間関係は表現が違うけれどすべてに入っている。だから、キャリア教育との関連の中に学習期の子供の育てたい子供像というか、キャリア教育で身に付けさせたいものを、まったく同じ表現でなくてもいいが、説明を求められたときにこのことと関係してきますというように書けないか。そうするとこの表をつくる意味がある。

人間関係形成能力とか情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力の四つとつなげることは言葉の問題だったらそんなに難しくないと思う。Ⅲ期はもうできている。Ⅱ期も上の「自他の違いを尊重する」と「役立つ喜びを体得する」を一緒にしてしまうとできる。Ⅰ期は少しいじらないといけない。

委員

Ⅰ期は、例えば1番目と2番目が①を想定して書いているので「学校生活に適応し、友達とのかかわりを深める」ということで一つにできる。Ⅱ期については、先ほど話していたところ

では3番目と4番目が将来設計ということだから、「役立つ喜びを体得し、社会と自己とのかわりから、自らの将来についての希望をふくらませる」とできる。二つとも将来設計を意図して書いたもの。

アドバイザー

だから、このまま言葉を使う。ここに書いてあることをイメージしながら、キャリア教育との関連のところを書けばよいのかなという気がする。

また、生活科の事例が、I期のところで子供像とつなげにくいところがある。3番目のポチは「身の回りの事象への関心を高める」と書いてあるが、要するにここで言いたいことは身の回りの事象に目を向け、自分と社会のかかわりに関心を持たせることである。だから、そんなふうに少し表記してもらえば完全につながる。

事務局

次回12月14日の会議が今年度の最終という予定にしている。予定している内容が三つある。一つ目が、この部会の理論部分である。以前、安井先生につくっていただいたものと私が提案したもの、その後の協議の中で明らかになった2本の柱について、私のほうでまとめて提案したいと思う。だいたいA4、2ページを予定している。

二つ目が、キャリア教育の実践プランである。また委員先生にご足労いただくが、これを確定する。A4にすると2ページ分である。三つ目が、本日も提案いただいた実践事例の修正部分の確認である。これは6ページになるので、2+2+6で本部会の中間報告書は10ページを予定している。